

令和 2 年 6 月 25 日現在

機関番号：37402

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2019

課題番号：18K12437

研究課題名（和文）外国人研修生・実習生と日本人の相互イメージの形成

研究課題名（英文）How are mutual images of foreign trainees/interns and Japanese made?

研究代表者

塩入 すみ (SUMI, SHIOIRI)

熊本学園大学・外国語学部・教授

研究者番号：60411039

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：ベトナム人実習生の対日イメージは送り出し教育機関や個人のネットワークを通じて来日前から形成されており、信頼性（仕事に厳しい、責任感が強い）に関して肯定的イメージが強い反面、親和性（親切、温かい）に関しては否定的イメージが強い。特に「日本人に怒られないように」といった抑圧的意識や「日本人はベトナム人に偏見を持っている」といったイメージは、来日経験のあるベトナム人の間で共有されている。しかし、実習生として来日した後、滞在期間が長くなるにつれ、対日イメージの具体化と個別化、多様化が進む。その際、実習生と関わる同僚の日本人のベトナム人に対する意識や態度が、実習生の対日イメージ変化の鍵となっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在外国人実習生の雇用条件等の問題は社会問題となっているが、個人の意識に関する問題は充分取り上げられていない。実習生と日本人がお互いのイメージを知ることで偏見や無知を認識し、新たなコミュニケーションの方法を見出すことができるだろう。実習生のもつ負の対日イメージを良好なものにしていくためには、来日前と来日直後の教育・研修機関における教育の方法・内容の再設計と日本に関する情報ネットワークの構築、実習生と日本人を繋ぐ日本人の育成と制度化等が有効である。本研究のデータと提言は、今後の実習生に対する日本語教育が、海外の機関への情報提供や、職場での日本語教育人材の育成といった方向性を示すものである。

研究成果の概要（英文）：The image of Vietnamese trainees to Japan has already been formed before coming to Japan through the sending-out educational institutions in Vietnam and networks of individuals. There is a strong positive image of Diligence (hard work), but there is a strong negative image of Sociability (kind, friendly). In particular, the authoritarian image of "be careful for fear of being scolded by Japanese" and the image of ethnic prejudice against the Vietnamese are shared among the Vietnamese who have come to Japan. However, after coming to Japan as a trainee, as the length of stay increased, the image of Japan became more concrete, individualized, and diversified. At that time, the presence of Japanese colleagues who are actively involved with the trainees is the key to image formation.

研究分野：日本語教育

キーワード：外国人研修生 ベトナム人 相互イメージ 対日イメージ 信頼性 親和性 権威主義 民族的偏見

1. 研究開始当初の背景

近年急増する外国人研修生・技能実習生（以下、実習生と呼ぶ）をめぐる問題は、労働条件など人権をめぐる観点から社会的に注目され、その実態も徐々に調査・研究されつつあるものの、実習生と日本人の間でどのようなコミュニケーションがなされ、お互いにどのようなイメージを形成しているのかといった個人の意識に関する調査はまだ進んでいない。背景には、実習生の存在が日本社会でいわば「不可視」の存在になっており、彼らの声が一般の日本人に届きにくく、結果として日本語教育を始めとする支援が受けにくいという現状がある。「不可視」は物理的・経済的・精神的に形成されている。実習生が日本語教室に参加するのを快く思わない雇用主も少なくない。実習生が他の工場の実習生と接触すると給与や環境などの比較をし、不満が生じたりするからだ。社会的な「不可視」により、実習生に関わる調査は非常に困難な側面がある。個人の意識に関する基礎的な調査の不足は、実習生の適応に関わる問題の解決を遅らせている。

2. 研究の目的

日本語教育の分野では、近年実習生を対象とした調査が増加し、彼らの生活・労働・日本語学習環境等の実態も徐々に明らかにされている。また、異文化適応・異文化理解といった分野においては、アジア諸国の若者の日本に対するイメージの調査、アイデンティティと外国人受容の考察等、日本人及び外国人双方の相手に対する意識の調査が行われている。日本語教育及び異文化適応の分野におけるアプローチは、実習生を日本語学習者、あるいはアジアの若者として位置付けることで、従来の留学生等との比較が可能になり、実習生の異文化適応と言語習得に関する具体的な対応に結び付くものと考えられる。

本研究は、以上のような背景と実習生に対する従来の調査・研究の動向を踏まえ、熊本県内の市民支援団体コムスタカ（外国人と共に生きる会）、ベトナム人実習生の受け入れ事業を行っている日越協同組合及びベトナム・トレーディング、そしてホーチミン市の実習生送り出し機関 ANH THAI DUONG Company Limited（ADC）の協力を得て、実習生の来日前から来日中の意識、そして周囲の日本人の実習生に対する意識を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

研究方法は量的・質的研究方法を併用している。量的方法(1)-(3)では、留学生に対する岩男・萩原(1988)による社会心理学的調査を参考にし、留学生の対日イメージと比較するべく同じ質問項目を入れている。実習生の来日前と来日後の対日イメージの変化を知るために、来日前、来日直後、来日後、半年以上の3段階に分けて調査を行った。対象者は同一人物ではないため縦断的調査とは言えないが、傾向は把握することができる。

質問紙では、留学生の対日イメージの社会心理学的調査（岩男・萩原 1988）のSD項目より4つの因子〈親和性(Sociability)〉〈勤勉性(Diligence)〉〈信頼性(Reliability)〉〈先進性(Modernity)〉について6段階で回答を得た。対象者の属性については、年齢を見ると男女とも20-22才が最も多いのは共通しているが、女性の方は18-19才、男性は23-25才の層にも多い。今回の回答者は女性の方がやや年齢層が低い傾向が見られた。次に、日本語学習歴を見ると、来日前は6か月未満が多いが、来日直後にはそこに学習歴が加わるため、来日6か月以上

の研修生では1-2年という回答が多く、全体で見ると日本語学習歴は6-11か月が多い。日本語能力試験レベルは送り出し機関により受験の有無に差がある。ADCではJLPT-N5の取得率が非常に高い。また、日本語能力のレベルは滞在年数に比例し、来日6か月以上ではN3の合格者も見られる。全体的には日本語能力を証明する何らかの試験を取得している実習生は5割程度であった。最終学歴は、対象者194人のうち155人が高校卒業で79.9%を占めたが、女性より男性の方がやや学歴の高い傾向が見られた。

(1) 【来日前】送り出し機関におけるアンケート調査及びインタビュー

対象者	送り出し機関の学習者（質問紙回答82名）、1991-1999年生まれ。
調査実施日	2018年9月21日
調査場所	ベトナム・ホーチミン市・ANH THAI DUONG Company Limited（ADC）
調査方法	アンケートはベトナム人通訳を介しADCの教室にて一斉に実施。回答はベトナム語、日本語。インタビューはADCの学習者及び講師等8名、ADC内の教室で通訳を介した。

(2) 【来日3か月以内】受け入れ機関におけるアンケート調査

対象者	熊本のベトナム人実習生受け入れ機関日越協同組合のベトナム人実習生（質問紙回答82名）。来日後3か月以内、企業等配属される前の研修中。年齢1989-2000年生まれ。
調査実施日	2019年9月1日～12月31日
調査場所	熊本市・日越協同組合
調査方法	アンケート調査はベトナム語の調査票により、回答はベトナム語、日本語。

(3) 【来日6か月～3年の実習生へのアンケート調査】

対象者	組合より各企業配属後の来日半年～3年のベトナム人実習生23人。
調査実施日	2018年8月6日～8月12日
調査場所	オンライン
調査方法	調査票をオンラインで配布、オンラインで回答。ベトナム語、日本語。

質的方法(4)は、2018年8月から2020年1月まで、ベトナム人実習生11名、その職場の同僚や雇用主等の日本人12名に対し、インタビューを行った。

(4) 実習生と日本人へのインタビュー調査

ホーチミン 2018年9月実施	ベトナム人学習者6名、ベトナム人教師2名
宇城市農家 2018年11月実施	ベトナム人実習生2名、農業経営者夫妻2名
熊本市工場 2018年12月実施	ベトナム人実習生3名（自宅）同僚日本人3名
熊本市内 2018年8月実施	ベトナム人通訳（監理会社勤務）1名
2020年11月実施	ベトナム人通訳（食品工場アルバイト）1名

4. 研究成果

4.1 来日前のベトナム人実習生の対日イメージ 親和性の低さと差別・偏見への意識

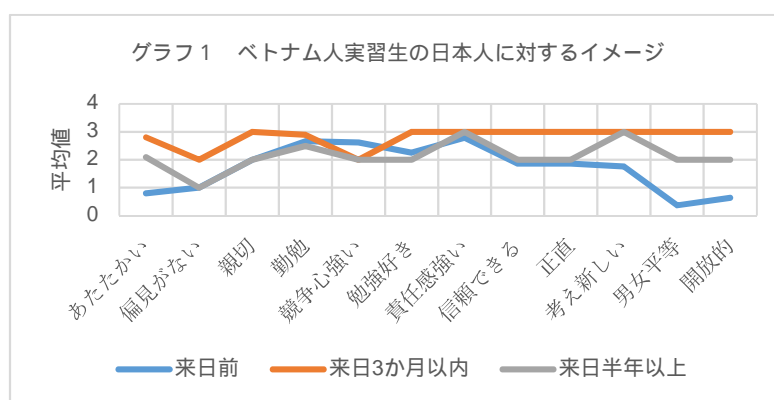
来日前アンケート調査の結果明らかになったのは、まず、親和性の相対的低さである。1975年の在日留学生に対する調査では、日本人の勤勉性や信頼性は高く評価される一方、その先進性は

低く評価され、特に親和性（温かい、偏見がない、親切等）はアジアの留学生の場合低いという傾向が指摘されている。今回の調査でも4つの因子のうち親和性が最も低く、特に「温かい」「冷たい」「偏見がない」「偏見がある」という項目で低く分布しており、1975年の在日留学生の調査と共通している。一方、記述式回答では「日本人について聞いた良いこと」として「親切」「優しい」という親和性が最多、「悪いこと」として「冷たい」「ベトナム人に対する差別や偏見がある」という回答が最多であった。差別や偏見があるというイメージは、複数の回答者が口にした「日本人に怒られないように」という抑圧的な意識と共に、負の対日イメージを形成している。

次に、来日前の実習生の日本人に対する親和性に関わるイメージ形成要因を見ると、「インターネットやSNSで知った(73%)」「学校で勉強した(64%)」「日本に行ったベトナム人から聞いた(53%)」が上位を占め、来日前のイメージは主にメディアや同国人のネットワークによる情報により形成されていることがわかる。

4.2 来日前後のベトナム人実習生の対日イメージの変化

次に、来日前・直後・半年後以上という時間との関係で、対日イメージの変化を見ていく。



3つの時期で共通しているのは親和性の低さ、特に「偏見がない」という項目の低さである。また、親和性の中で「親切」という項目はいずれの調査でも共通して唯一高得点であったが、これは岩男・萩原(1988)でも見られた傾向である。今回の回答者の多くが「日本人のいいところ」は「困っていると手伝ってくれる」「おもてなし」などと答えているが、「親切」の意味には「助けてくれる」「丁寧な態度」のような「あたたかさ」とは異なる、社会的意味が含まれていると考えられる。

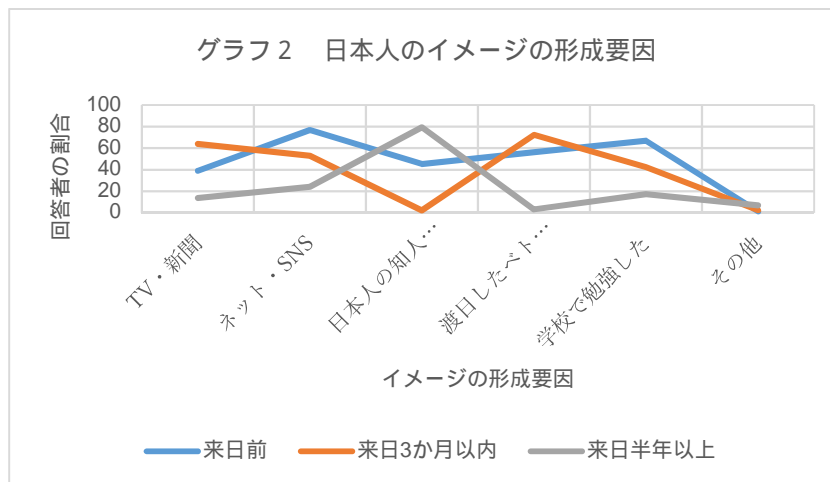
また、日本人が「つめたい」というイメージは来日前において強く、来日後の方がやや好転していることから、実習生は来日前、ステレオタイプとも言える対日意識をもっていると言える。

注目すべきは、来日3か月以内の熊本市内実習生受入れ機関で研修中に行った調査である。日本人に対するイメージを数値化する質問に対し、すべて+3の最高値を付けている実習生が顕著(82人中34人)もあり、グラフにもこうした抑圧的な反応が直線となって現れている。これは、来日して間もない時期で日本に対する期待が大きいこともあるが、何より企業に配属される前の研修期間中であるため、日本人に対する悪い評価は実習生に不利益を生む可能性もあり、避けたいということがあろう。その後、各職場に配属され半年以上経つと、比較的多様な意見が

見られるようになる。

4.3 イメージ形成要因 間接的要因から直接的要因へ

次に、アンケート調査の結果から日本人に対するイメージの形成要因を見てみる。



来日前、及び来日3か月以内の実習生の場合、日本人のイメージ形成要因としては、「ネット・SNS」、「渡日したベトナム人から聞いた」、「学校で勉強した」等、間接的要因が多いが、来日半年以上になると「日本人の知人がそうだから」という直接的要因が突出している。

来日前の実習生へのアンケートのフォローアップ・インタビューでは、複数の人が渡日経験のある家族や友人から様々な経験を聞き、日本人に対するイメージを形成している様子を語った。実習生は来日前から日本人に対するイメージを間接的要因により形成し、来日期間が長くなるにつれ直接的要因に移行していることがわかる。

4.4 インフルエンサーの存在

アンケート調査と並行して行ったインタビューにより、実習生の対日イメージを形成する直接的要因となるのは主に職場の同僚の日本人であること、積極的な関係を持つとする日本人の存在の有無が、対日意識に大きく影響することが明らかになった。こうした日本人はいわばインフルエンサーとして実習生と日本人の間を繋ぐ役割を果たしている。ところが、小規模農家など雇用主と実習生の関係が直接的で個別である場合、双方にストレスのたまりやすい状態になると考えられる。

以上の調査結果から、ベトナム人実習生の負の対日イメージ（負の親和性・差別意識・抑圧的意識）を払拭し良好なものにしていくためには、来日前と来日直後の教育・研修機関における教育の方法・内容の再設計と日本に関する情報ネットワークの構築、実習生と日本人を繋ぐ日本人インフルエンサーの育成と制度化等が有効であると考えられる。

本研究の成果は、今後の実習生に対する日本語教育が教室での語学教育にとどまらず、海外の機関への情報提供や、職場での日本語教育人材の育成について積極的に施策を講じていくべき論拠を提示するものである。

引用文献

岩男寿美子・萩原滋(1988)『日本で学ぶ留学生 - 社会心理学的分析 - 』勁草書房

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 塩入すみ
2. 発表標題 外国人技能実習生と日本人の相互イメージの形成 ベトナムでの送り出しの実態調査から
3. 学会等名 異文化間教育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----